
とある科学の能力記憶

久留間水樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の能力記憶

【Nコード】

N8162Y

【作者名】

久留間水樹

【あらすじ】

一歩通行が2か月前出会ったのはとある実験によりポロポロにされたレベル4の少女、小鳥遊双葉だった。何故か双葉は義理の妹として部屋に居候（ただ金はちゃんと払ってる）することに。一方通行がお兄ちゃんというところでもない設定ですが、なんか書いていると楽しい。凄く楽しい。読んでると楽しいのかもしれない。そんな小説です。あと作者は義理妹とか妹とか妹設定が好き。とある魔術の禁書目録SS。

第一話 一方通行と妹 なんでこいつはこんな扱いにくいんだ？

現在、巷はドキドキワクワクの寝ても怒られない5月のビックイベント、GWの真っ最中である。

しかしそんなことは、一方通行にとってどうでも良いことだった。今は、それより。

有り得ない、といつも朝に一方通行は恒例行事の様に思う。

のそりとソファの上で体を起こした彼は、台所の方へと目を向けた。

そこでは、可愛らしい少女が朝ごはんを作っていた。

「……有り得ねエ」

「あ、お兄ちゃん起きた？」

一方通行が起きたのに気づくと、少女は嬉しそうにこちらへ駆け寄ってきた。

「朝ごはんもうすぐできるからね。ちょっとまってね」

一方通行の脇にたたんでおいた服を置き、もう一度ぱたぱたと台所で駆け回る少女。

少女の名前は小鳥遊双葉^{たかなしふたは}。中学 正確に言うならば常盤台中学の2年生である。

そして、かなり優秀なレベル4の一人、なのだが

「有り得ねエ」

一方通行はもう一度呟いてソファに 台所の様子が目に入らな

いように反対側をむいて　もう一度横たわった。

あの様子を見てみると、ただの女の子ではないか。

その様子を目ざとく見つけた双葉は「こらー！お兄ちゃん、早く起きないと健康に悪いよ？おひさまだよ？日がルンルンだよ？」と訳の分からないことを口走る。

「うるせエ」

「お兄ちゃん、朝ごはん天ぷらがいい？ハンバーグがいい？」

「朝から重たすぎだ」

阿保かこいつは、と一方通行は半眼になりながらもそのそと起き上がり、冷蔵庫からコーヒーを出して口に含んだ。

双葉はほえーと間抜けな声をだして「ブラックとはお兄ちゃん凄いなー」と感心している。そんな彼女は砂糖と牛乳をいくらいれても苦い苦いとコーヒーが一切飲めなかつたりする。

こんな生活もこれで2ヶ月目に入った、と一方通行はうんざりした。

「オマエ、出ていこうとは思わねエの？」

「全然」

屈託の無い笑みで答えられてしまった。一方通行はわずかに黙り、そして

「殺すぞ」

「んー、いいよ？出来るものなら」

「……」

その挑発に、一方通行は双葉の体に触れようとした。が、出来ない。

「……チツ」

「うん、お兄ちゃんは優しいもんね」

「……飯係が居なくなると思い直したただけだ」

双葉は笑って一方通行にお皿を渡した。その上には先ほどいつていたハンバーグや天ぷらから、なぜか肉饅まで載っていた。

「……オマエ、ちょっとはバランス取りやがれ。なんで洋・中・和の三点セットなんですかア？おかしいんじゃない？」

「えー、なんか冷蔵庫に残ってたのそれしかなかったんだもん。しようがないよ」

「朝からマジ重いなアテメエの作る料理は」

一方通行は文句を言いながらもテーブルできちんと最後まで食べた。その様子に、双葉はニコニコと笑って

「お兄ちゃんはえらいねえ」

「……殴ンぞ」

双葉は一方通行の暴言には一切動じず、お皿を台所へ持って行って洗ってしまった。

「どうもこいつはやりにくい。」

一方通行は着替えを済ませるとドアの方へのっそりと歩きだした。

「あれ？お兄ちゃん外出？双葉も行こうかな」

「くんな」

「ん。分かった」

なんでこんなときだけ聞き分けがいいんだよ、と一方通行は突っ

込みたくなつた。

扱いにくい。それに、妙に素直。

それが一方通行がはじき出した、小鳥遊双葉への人柄だった。

「お兄ちゃん、無駄な喧嘩はよしてね」

「……うるせエ」

「そういうときのお兄ちゃんはよく聞くもんね。じゃあ、いつてらっしやい」

「……あア」

ムスつとした顔の一方通行が出ていくと、双葉はエプロンを外し、短パンに半袖というラフな格好になる。それから、することもないので部屋のお掃除をすることにした。それが終わったら少なくともてきた食料の買出しに行こうと頭の中で予定を組み立てる。

小鳥遊双葉。まだ中学生だが今すぐにもお嫁に行ける家事能力を身に付けていたりする。

一方通行はまだ朝になつたばかりの街をぶらぶらと歩いていた。

別に目的があつたわけではないが、しかしあの家にいるよりは外に出たほうが楽だという理由だった。

あの小鳥遊双葉という少女は、2ヶ月ちょっと前の2月後半に出会った。

何故だか一方通行になつてきて、部屋の前まで付いてきた拳銃家から締め出すと朝起きたら玄関の前で寝ていた。マンションから放り出しても朝起きれば必ず玄関前にいる。完全な不審者だった。

もしこの場合、一方通行が女で、双葉が男であつたら捕まってい

たのは双葉のほうであろう。が、生憎と一方通行は男だったし、双葉は　しかも可愛らしい　女の子だったので、ご近所さんからの目が痛い痛い。普段はそんなことを気にならない彼だが、連日色んな人に「君、あの子放っておくつもりかい？」「知り合いなんだろ？助けてやりなよ」と言われ続け、腹が立ったので家にあげさせた。次に、双葉は「金を払うからここにすませてくれ」と頼んできた。断った。次の日には法律上義理妹になっていた。なぜだ。

でもまあ家事をやってくれるし便利ではあるので一応今は追い払うことをしなくなった。毎日朝から作る重い料理はかなり迷惑だが。

「チツ……」

舌打ちをする。それでどうにかなるわけではなかったが、取り敢えず気晴らしだ。

そこらへんを彷徨っている不良にでも苛々をぶつけるか、と思っただが出てきたときに『無駄な喧嘩はしない』と約束してきてしまったので何となくやりづらい。

一方通行はやはりそれにも苛々して目の前に置いてあったバイクを蹴り飛ばした。バイクは一瞬にして鉄塊に成り果てる。

一度双葉を殺してやったほうがいいかもな、と彼が物騒なことを考えていると

「あー」「オイオイ兄ちゃんなにしてくれちゃってんですかー？」

「オレらの大事なバイクが台無しじゃねえか」「金払えよ」「ヒヤッヒヤッヒヤッ」

「取り敢えず殺そうぜ」「いいないいな」「てことで兄ちゃん手合わせ願いますよ」「ヒヤッヒヤッ」

後ろから、低俗な声かけられた。

彼はめんどくさそうに一度舌打ちし

いいチャンスだとばかり

後ろを向いた。

そこには、がらの悪い大学生風の男達が数人。

喧嘩を売られたんだからしょうがねエよな。

そう勝手な理屈を付け、苛々をぶつける対象を見つけた彼は、獐
猛に笑った。

「じゃ、こちらこそヨロシク頼みますよオ 三下」

数分後、その場には地獄絵図が展開されることになる。

兄がそんな憂さ晴らしをしているとは露ほど知らず、双葉は掃除
を終え常盤台の制服に着替えた。

外出時には常盤台の制服を着るよつんという規則を真面目な彼女
はきちんと守っていたりする。

彼女はるるんと上機嫌で鞆を持ち、部屋から出た。

革靴の足音が、カツカツとテンポ良く、踊るように打ち出される。

1時間程で不良たちの組織は壊滅した。

どうやら一方通行が喧嘩を売られた（と思っているのは彼だけで
あり、傍から見れば普通に彼が喧嘩を売っている）不良たちは結構
大きい組織の一員 スキルアウト だつたらしく、仲間の敵討
ちか何だか知らないが一方通行に大量の喧嘩をふっかけてきた。

これ幸いと一方通行も喧嘩を買う。おかげで、かなりの苛々がこ

の1時間で解消された。

スキルアウトに感謝するなんて考えもしなかったぜ、と一方通行は小さく奥の方でクツクと笑った。

と

「へー、君結構可愛いね」「おいまだ昼だぜ」

「お兄さんと一緒に遊ばない?」「何時になるんだよ」

おや、まだ残党が残っていたのか、と路地裏で不良たちがたむろっている所へ一方通行が覗いてみると

双葉がいた。

「……チッ」

不良に囲まれた双葉は別に怯えてはないものの、戸惑っている。彼女はレベル4だ。見るところあの不良たちの能力はさして高そうにも見えず、同じレベル4でも、双葉にかなう相手など一人もいないはずだ。

レベル4の中でのトップ。それが小鳥遊双葉なのだから。

で、なぜ彼女が戸惑っているかというと、それは彼女の優しさからくる。

能力を使えば一発なのだが、それを使っているか分からないというか、使ったことにより怪我をさせるのが申し訳ないらしい。どうせ後で治してやるんだからいいんじゃないかねえか、と一方通行が呆れたほどだ。

ついでに、双葉を取り囲んでいる不良たちは双葉が戸惑っているのを力が弱い、または攻撃系の能力ではないため反撃できないつまり、ただの女の子と変わらないと思っっているらしく、見るからに鼻の下を伸ばしていた。

「ねえ、君何年生?」「それ常盤台だよね?」

「中坊にしちゃ中々悪くない顔立ちだな」「俺好み」

そんな気持ちの悪い言葉が風に乗って聞こえ、一方通行は顔をしかめた。

そして、双葉をさっさと連れて帰ろうと彼が足を踏み出そうとした瞬間。

「じ、ごめんなさい」

その瞬間、双葉を取り囲んでいた不良達がボワツと仰け反った。小範囲の爆風でも起こしたのかもしれない。

「なっ、てんめ…っ」「オイ、こいつやるぞ!」

「皆でかかれば大丈夫だ」「何ととってもただの女だしな」

双葉は眉を下げた。それにより、不良たちはさらに興奮する。大方、双葉が自信を無くした、とても思ったのだろう。自分たちならばこの少女を簡単に潰せるとまで思ったのかもしれない。

が、違う。

双葉は、やはり相手が怪我をすることを、申し訳なさがっていた。

「あの、怪我したくないなら……どっかへ行った方がいいと思いますけど」

双葉の忠告に「なんだろうゴルア!」と不良たちが色めき立った。双葉には申し訳ないが当たり前である。

「えと、じゃあ、んー……こっ、ものが多いんですね」

双葉のつぶやきに、不良たちは「はあ？」という顔をした。そして、双葉は言う。

「なので、物でもぶつけて昏倒させて頂きます」

その瞬間、不良たちの頭上には大量のボールやゴミ箱、何故か車の扉部分などが現れ、そして落ちた。

勿論、双葉は一步たりとも動いていない。

ドガバキヤグキ、と嫌な音がしてそれらが男たちと共に地面へと伏した。

「……んー、路地裏、今度から使うのやめよう」

「当たり前だろ、ンなモン」

双葉が男たちの怪我を治そうとしゃがみこんだのと、一方通行が双葉の方へ歩きだしたのはほぼ同時だった。

双葉はえ？え？と困惑した顔を浮かべた後、

「お兄ちゃん！？なんでここに!？」

「たまたま見てた」

「えー、なら助けてよー」

助けなくても自分でも対処出来るだろうが、と一方通行が吐き捨てる時、それとこれとは違うのー！と反論された。意味が分からない。

双葉はきよろきよろと不良たちを見渡し、主だった怪我をしているものの傍に駆け寄って、その怪我に手を触れた。その瞬間、その怪我は消える。

「……」
スキル・メモリー
「能力記憶」
ねエ………」

一方通行は独りごちた。

爆風を巻き起こしたのは「エアロ・シューター風使い」の能力。

男たちの上に物体を表したのは「アップポイント座標移動」の能力。

そして現在怪我を治しているのは「オート・リパース肉体再生」の能力。

双葉が持っている能力は「マルチスキル多才能力」ではない。むしろそれを逆手にとったような能力である。

「スキル・メモリー能力記憶」。自分が見た能力を自分の能力レベルで操れる能力」

つまり、言い換えるならば”多才能力を作るための能力”とでも言うべきか。

滝壺とは根本が似ているものの、実際にはかなり遠い。

つまり双葉が持っているのは、”他人の能力をコピーする能力”なのだから。

反則技とも言える能力である。一人で学園都市全員の能力者

勿論レベル5の力は再現できないが、レベルアップを演じて見せることだって不可能ではないはずだ。

だからこそ、彼女は「レベル5候補生育成プログラム」の一人に抜擢され、一番優秀な成績を収めたのだろうから。

が、今のところそういうのはどうでもいい、と一方通行は思っている。

だから、今は。

「オイ、帰ンぞ」

「あつはーい！」

双葉はぱたぱたと一方通行の方へと駆け寄ってきた。

一步通行はそれを待たず、さき先行っていしまうが、双葉はその

距離を空間移動で詰めた。

二人は、仲良く 結構一方的に 家路へと帰ることになるの
だった。

第一話 一方通行と妹 なんでこいつはこんな扱いにくらいんだ？（後書き）

感想評価、頂けたら嬉しいです！ちょっと滝壺のどこ曖昧かも…！
指摘頂けたら嬉しいです！

第二話（前書き）

ちよつとずつ、区切りがいいところで毎度毎度更新することにした。ので、結構頻繁に次の回が提示されるまでこの回を見てくれたら嬉しいかもです。ついでにタイトルは途中まで書いてから書きます。

第二話

双葉は一方通行の上に毛布をかけようとしたが、その毛布が跳ね返されてしまった。

現在は夜である。GWの最終日。双葉がいつものように 今回 はたまたま義理兄が見ていたが 不良を倒した日から2日後。

一方通行は毛布もかけずソファでさっさと寝てしまったので、風邪を引いてはいけなと思った双葉は毛布をかけようとした、ら跳ね返されて今の状態にある。

毛布が飛んできた急いで若干ジンジンと痛む指先を抑えつつ、双葉はいつものように能力を使った。

「右手、エレクトロマスター発電能力、左手、パイロキネシス発火能力」

双葉が呟くと、右手には電気がまとわりつき、左手の掌の上には小さな炎が浮かび上がった。

成功、と双葉は嬉しそうに笑う。

これは毎日の日課。一方通行が寝た後に行う自主トレだ。

一度に複数の能力を発動するのを鍛えるための特訓。

「体表にはオフエンスアーマーを展開」

もう一度呟き、また新たな能力を発動させる。

そして左右の（能力が発動したままで）手を自分の体に押し当てた。

「……よし」

かなり危険とも言える行為だったが、双葉には一切の傷がない。

当たり前だ、空素装甲で体を守っているのだから。

以前アイテムという暗部のグループのメンバーの一人と戦った時に得た能力で、その能力者は掌から数センチしかそれを操れなかったようだ。双葉には何故か全身でそれを操れる。まあ、その能力者もこの能力をつかった『自動防衛能力』があるので双葉とは対して変わらないが。

双葉は一旦発動させた3つの能力を解き、ふーっと息を吐いた。同時に発動するのはかなり疲れるのだ。三人がやる計算を一気に一人で行ってしまうようなものである。

水を飲み、一息するともう一度双葉は能力を発動させた。と、彼女は思う。

もしかして、いやずっと思ってる、やっぱりやめてたけどお兄ちゃん頭の頭の中を読んでみようか。

いやいや、やめなさい、と彼女の自制心がそれを止める。いやでも気になるー！と好奇心旺盛な部分が反論し、「うわあああああぁー！！」なんか叫んだ。

その瞬間、高速で物が飛んできた。

「うるせエ」

「ごっごめんなさいっ！あ、あとあんまり置時計は投げないほうがいいと思う！」

双葉は投げられてきた置時計をなんとなくキャッチし、コトンとテーブルに置いた。一方通行はチツと舌打ちする。

「だいたいなんだア？夜に練習とかイイ子ぶってテメエは褒められたい優等生のつもりかよ」

「そういうわけじゃないけど……なんとなく、無意識っていうか。」

やらなきや いけないみたいな？なんでだろうね。でも、お兄ちゃん
五月蠅いなら音を反射すればいいんじゃない……」

「チツ、チカチカ光ったり風の向きが急に変わったり オレだからこそ苛々するんだよ」

確かにそうかもしれない、と双葉は思った。彼は方向ベクトルを操る能力者だ。ずっとベクトルが変わり続けたらうざいのもしれなかった。んー、と双葉は唸り、

「じゃあ外にいつてれんしゅ」
「テメエには黙って寝るっていう選択肢はねエのかよ」

双葉は眉を下げた。

でも、多分今出ていったら間違いなくこの義理兄は怒るので、おとなしく彼のソファの下 つまり地べた に横たわった。

一方通行はもう一度だけ舌打ちすると、今度は本当に眠りに落ちてしまった。

第二話（後書き）

「のあとにはキャラの台詞で
「」のあとにはキャラの台詞で
す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8162y/>

とある科学の能力記憶

2011年11月26日01時48分発行